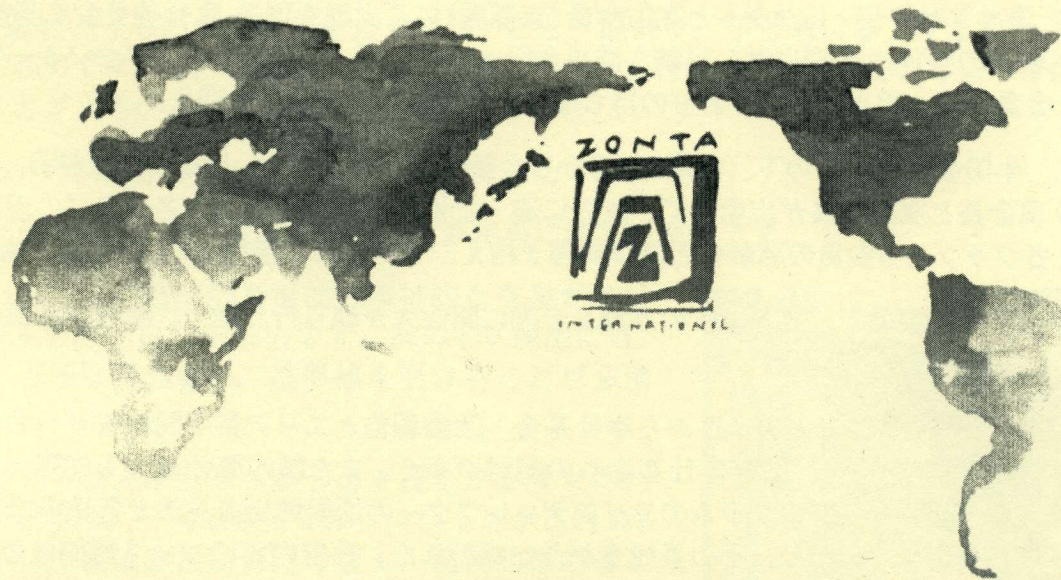




OSAKA・II ZONTA CLUB

大阪Ⅱゾントクラブ第46号(2018年9月)



巻頭言

会長に就任して

新会長(2018～2020) 内藤 恵子



新年度から会長をお引き受けした内藤恵子です。母を91歳、父を99歳で見送り、眼科開業医を辞め、産業医をしております。女医会の監事や習い事で毎日忙しく暮らしておりますが、ZONTAの活動も考える時間ができました。今までネパールの子供を育てる会の理事をしておりましたが、会長が逝去し、活動できなくなりました。大阪Ⅱゾントクラブはベトナムでの支援を長く続けています。私の任期中に、できればみんなで視察に行きたいと思えます。ボランティア活動は、自分の目で見て実感すれば、身につくと思えます。メンバーの皆様に賛同して頂ければ幸いです。私たちの活動は目に見える、実感できる活動にしていきたいと思えます。2年後はZONTA100周年です、みんなでシカゴに行きましょう。今度は、ゲストで楽しみましょう。



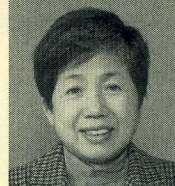
チャリティイベントにて



大阪Ⅱゾントストア

午前部

幡山 玲子



5月27日、各地から170名余のゾンシャンが出席してエリアミーティング本番が始まった。

1年以上前から、エリアミーティングのホストクラブとして心積もりと準備をしてきたが、ここ数ヶ月、月1回の割合で、澤井エリアディレクターと高山会員(京都雅)にご出席を頂き、実行委員会を開催してきた。委員会では申込状況の整理や準備作業の詳細な詰めを行ってきたが、足りないことがないか一抹の不安を覚えながらも、会員一同、担当しているお役の持ち場持ち場で緊張して当日を迎えた。

まずはじめに、牛田会員の司会の下、9時40分から会長会議が始まった。国際ゾンタ委員、地区理事・委員、各クラブ現会長と次期会長が出席して、直近に迫った世界大会の連絡と、各クラブの現状について話し合われた。各クラブとも会員の高齢化と減少問題を抱え、その対応に苦慮していることが報告された。

続いて、徳光会員の司会の下、澤井ADの点鐘を合図に開会式が執り行われた。物故者黙祷の後、澤井ADと真鍋ガバナーからご挨拶を頂戴した。

引き続きビジネスセッションで澤井ADから奉仕基金・活動報告とエリア費中間報告が行われた。今回は2年後の設立100周年を控え、国際奉仕基金への寄付が多く、また国内奉仕基金も国際大会に向けての準備寄付が多くなっていった。プログラムのエリアディレクターの活動報告を見ると各地の行事出席や理事会出席等がほぼ毎月のようにあり、その多忙さがうかがわれた。報告内容について質問はなく、予定より早くにセッションは終了した。

中塚会員の司会による昼食・懇親会は11時30分からの予定であったが、予定時間より早くセッションが終了したため、昼食会場の準備ができておらず、参加者にはお待ちいただいた。そのせいか澤井ADのおもてなしとしてフローリン・クロイトルさんのヴァイオリン演奏が予定されていたが、パフォーマンスが始まる前に食事をされる方もあり、せっかくの演奏を静かにお聞きすることができなかった。クロイトル様には大変失礼なことをした。アベマリア等2曲演奏してくださったが、もう少しじっくりお聞きしたかった。

午前中のエリア3の総会としてのセッションは無事終了し、午後は、澤井ADのご挨拶にあった「学び」の場に席を移した。



フローリン・クロイトルさんの演奏

正井禮子氏の基調講演を聞いて

清水 聖保



認定NPO 法人女性と子ども支援センターウィメンズネット・こうべ代表理事の正井禮子氏をお迎えして「女性と子どもへの暴力のない社会をめざして」と題しましてお話をして頂きました。

DVの定義というものが単なる暴力ではないこと、面前で、子どもに暴力がなされているのを見られるのも暴力です。しかし、DVを受けても夫と別れた女性は、たった10.8%なのです。金銭面がネックになることが大きいという不安がますからです。

こんなDVの実態を、我々はどこまで知っていたのでしょうか？

制度もままならない中、生きていくことが本当に難しい現状です。

生きていくために経済的な援助、精神的な支援がなければDVからの脱出は、難しいです。真のDV脱出には、上下関係、支配関係のない、境界線を引けることが必須です。

そんなことを本人から学べる心の支援者が必要なのだらうと思いました。一人でも多くのゾンシャンがこのDVの現状を学び、経済的援助だけでなく、精神的援助者となれることを願いつつ基調講演を聞かせて頂きました。



ワークショップⅡの司会を終えて

尼木 純子



リーガロイヤルホテルで開催した第10回エリアミーティングに際しまして、大会実行委員長芳川江子会員を中心として、エリアディレクター澤井様と高山様に毎月リーガロイヤルホテルにお越しいただき、大会準備委員会を設け、どのようにすれば大会がスムーズに運べるかを話し合いましたが、あっという間に当日が来た気がしました。

初めての司会でしたが、私は最後のワークショップⅡの司会でした。前の部の3人の皆様に順調に素晴らしい司会をしていただきましたので、何となく気楽に、そして澤井エリアディレクターが式次第の草稿を作ってくださいましたので、その草稿を読むだけで順調にことが運んだように思われ、ホッと胸を撫で下ろした一日でした。

大会までは、何となく緊張しておりましたが、無事に、手前味噌かもしれませんが、なかなか良いエリアミーティングとなって良かったと思っています。

最後に、矢代浩子様、千和加子様、三宅定子様、山崎利恵様、わかりやすい説明を有り難うございました。



エリア3ディレクター交代式

前日懇親会

久岡 眞佐代



2018年5月26日(土)午後6時~午後8時、イタリアンレストラン「ベラコスタ」(リーガロイヤルホテル大阪・アネックス棟7階)にて、エリアミーティングの前日懇親会が開催されました。

当日は朝から夏の到来を予感させる日差しが照りつけていましたが、懇親会がスタートする頃はさわやかな心地よい気温となり、ご来賓様、クラブ会長様、会員の方で総勢40名の参加をいただきました。

「ベラコスタ」は、大阪Ⅱゾンタクラブの例会場として、ときどきはクラブのイベント会場として、そして今回のエリアミーティングの準備作業室として利用させていただいたレストランです。

懇親会は、ガバナー真鍋洋子様のご挨拶と乾杯のご発声により始まりしました。ガバナーのご提案により参加者全員のくじびきによる自由席でしたので、どのテーブルも最初から和気あいあいと会話がはずみ、店内の壁一面に広がるガラス窓から堂島川やネオンに輝く夜景を一望しながら、これまで食べたことのないような斬新なパスタ料理やお肉料理を堪能しました。

また、急遽混成された女性合唱団(財務委員長岡部文子様、奉仕委員長岡澤則子様、エリア4ディレクター井野節子様、エリア3ディレクター澤井早和乃様、大阪Ⅱゾンタクラブ会員宮本典子様)による「春」のコーラスが心地よく会場に響き渡り、その美しい歌声に会場はさらになごみ、酔いしれました。

しばらくゾンタをお休みしていました私にとって、ゾンタ復帰早々に皆さまにお会いできたことは大変嬉しく、横浜大会の準備で大変お忙しい中でも、いつもどおりに元気に前向きのお話をされる皆さまの笑顔の中に「優しさ、思いやり」というボランティアの神髄を感じたひとときでした。



打ち上げ

中川 友里



6月24日(日)、エリアミーティングの打ち上げを、参加メンバー内藤会長・笠置前会長・芳川実行委員長・牛田さん・坂本さん・辻さん・西村さん・幡山さん・久岡さん・宮本さんと私、中川で行いました。会場は芦屋コシモプリュスで、笠置前会長と芳川実行委員長への花束贈呈で始まり美味しいお食事をいただきながら楽しい一時を過ごすことができました。

5月27日(日)当日、昼食・懇親会のフローリン・クロイトルさんのバイオリン演奏がとても美しくもう少し聴きたかった、ウィメンズネット・こうべ代表、正井禮子さんの基調講演はとても説得力あった、立教大学の葛西リサさんと2人のDV被害者ご本人が切々と話された体験や実情はとても鮮烈で涙しながら聞いておられる方が大勢いた、コンパクトに纏まり参加者にやさしい会場をセッティングすることができた、など色々な意見が聞かれました。しかし何よりエリアミーティング実行委員会に毎月出席しご指導とご助言をくださいました澤井エリアディレクターへの深い感謝を皆で再確認しました。最後に内藤会長から今年の活動予定や今後の抱負についてお話があり14:30頃レストランを後にしてJR芦屋駅で散会となりました。

私は今回初めてエリアミーティングに参加させていただきましたが、5月26日の前日懇親会から全国のZontiansにお会いできてその集結力に驚きました。また他クラブの方と楽しく会食をして色々お話を聞かせていただきましたことで私自身のZontianとしての意識も高めることができました。



アメリカ・イアハート月間に寄せて ～その業績と生涯～

西村 博子



1月11日はアメリカ・イアハート記念日。この日の例会で、私たちは国際ゾンタの奨学金3本柱の一つであるアメリカ・イアハート奨学金制度設立の貢献者アメリカ・イアハートについて勉強しました。

Amelia Mary Earhart (1897.7.24～1937.7.2)

世界で初めて大西洋横断飛行したアメリカの女性飛行士ですが、赤道を一周に挑戦する途中、南太平洋で行方不明となりました。アメリカでは今も代表的国民ヒロインの一人で、その謎めいた最期は、今もなお話題に上がります。

2017年にはその関連ニュースとして【伝説の女性飛行士イアハート「生存写真」】として、マーシャル諸島から発信されています。何より、アメリカは自身の体験を通じて、女性の地位向上のためにゾンタの主要メンバーの一人として、熱心な活動をしていました。

奨学金は1938年に、女性パイロットでありゾンシャンであった彼女の功績を称え、航空宇宙学関連の科学・工学に関する大学院の女性研究者を支援する目的で設立され、今日まで、世界70か国1079人の女性研究者に対して、総額930万ドルの支援が続けられています。日本ではこの分野の研究者が少ないようですが、航空宇宙に関連する、例えば宇宙服とか宇宙食など、関連する分野の研究も認められています。山崎直子さん、向井千秋さんに続く女性を世界に送り出したいですね。



チャリティイベント Vol.23

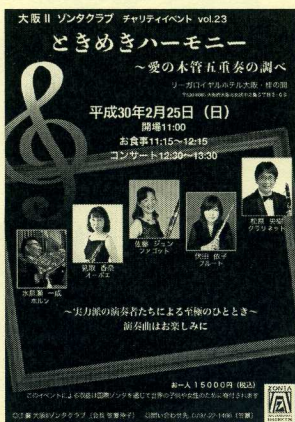
愛の木管五重奏の調べ

城本 友恵



2018年2月25日、ときめきハーモニー愛の木管五重奏の調べと題して、リーガロイヤルホテル大阪桂の間にてチャリティイベント vol.23 が開催されました。大勢のお客様をお迎えし、まずはお楽しみの一つである豪華なお食事を堪能しました。見た目も華やかで、細部にまでこだわりを感じる絶品のお料理でした。

次は本日のメインイベントである木管五重奏のコンサートです。フルート、オーボエ、クラリネット、ホルン、ファゴットの5名の演奏者による演奏が始まると、会場は一気にその世界に引き込まれました。温かくてやわらかい、そして軽快で楽しく弾むようなリズムに魅了されました。楽器紹介では、それぞれの楽器ごとに「大きな古時計」をワルツ風や寅さん風にアレンジなさり、茶目っ気たっぷりに演奏して下さいました。また、それぞれの楽器について丁寧にご説明下さいました。オーボエはリードを手作りする工程やその大変さ、ファゴットは5つに分解して持ち運ぶことができる、ホルンはギネスブックに演奏が難しい楽器として掲載されているなど、どれも興味深いお話でした。楽しい時間はあっという間に過ぎてしまい、ドビュッシーのリトルニグロのアンコールで終演しました。終始アットホームで和やかな雰囲気の中、木管五重奏の素敵な音色に酔いしれました。



一般社団法人神戸ダルクヴィレッジ

中田 智恵海



神戸市内に昨年発足した一般社団法人神戸ダルクヴィレッジに今年度から寄付されることになり、皆様の慧眼に改めて感じ入っている次第です。

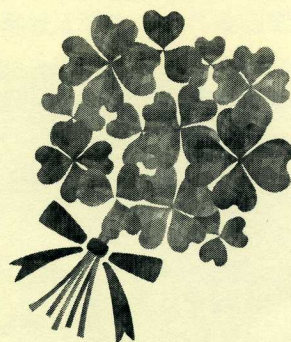
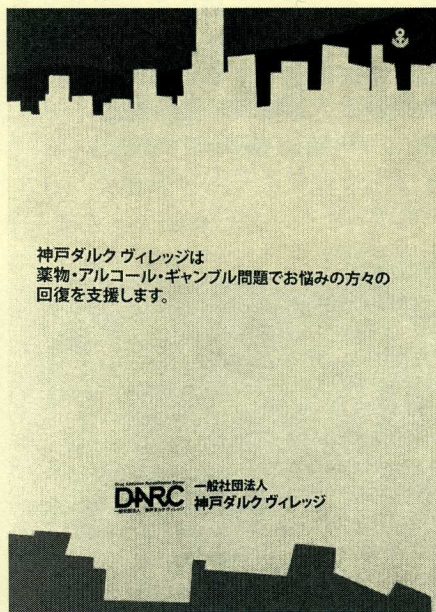
ダルクとは Drug Addiction Rehabilitation Center の頭文字を合せた造語で薬物・アルコール依存症の回復支援のためのリハビリデイサービスセンターです。ご承知のように依存症についての確かな治療法や解決策はありません。そんな中でダルクは具体的に回復のプロセスを踏む支援施設で、ここでのプログラムに従って徹底的に実践すれば必ず回復する、という希望のメッセージを伝えていきます。

基本的に同じ悩みを持つ仲間だけの自助グループで、回復者スタッフによる「当事者活動」です。仲間同士との関わりやフェロウシップ（仲間とのつながり）の中で回復するための「居場所」「時間」「回復モデル」を提供します。また、12ステップという運営のルールに基づいて1日3回の「ミーティング」を開き、想いや情報を共有します。ここでは、経験談を中心とした回復方法、失敗、挫折、希望などについて語る言いつばなし聞きつばなし（発言に関して反論や質問をしない）のミーティングです。

日本では約30年前に東京の西日暮里に「東京ダルク」が立ち上げられたのが始まりで、現在では約61ヶ所に地域の特色と独自の個性を活かしつつ、薬物依存症者の回復のための居場所として存在します。

神戸には薬物依存症支援の専門機関がありませんから、医療機関や司法機関に繋がっても、その後の生き方を支える包括的な支援が依存症関係では難しく、依存症で苦しむ家族や本人の相談や助けを求める場所がなかったために、他県に比べると依存症の理解やネットワークに関しては非常に希薄な状況です。そのようなことから、地域の理解とつながりのために活動するだけでなく、スタッフはデイセンターの利用者と今日一日（明日や昨日のことにはこだわらないで今日だけを大切に生きる）を共に歩く存在です。

ダルクは困った時に駆け込み寺のように使える安全で安心できる居場所を提供してくれます。これまで神戸では2回、立ち上がりましたがいずれも事情により解散いたしました。依存症者が増加傾向にある今、この神戸ダルクヴィレッジは何としても継続していて欲しい施設です。大阪Ⅱゾンタがその一翼を担うことになれば大いに意義のあることとなるでしょう。



ダルクのパンフレット

2017年度の活動

月	日	曜	例会場所	事業内容	委員会活動その他
2017					
6	8	木	リーガロイヤルホテル ベラコスタ	前年度決算報告及び今年度予算案 今年度活動計画 寄付先の検討 地区役員への推薦	各委員会 今年度活動計画
7	13	木	リーガロイヤルホテル ベラコスタ	澤井ADのご紹介 卓話「健康寿命を伸ばす若返り体操」 講師 ラフィーラ体操教室 梶屋知恵氏	澤井ADクラブ訪問
8			夏休み		
9	14	木	リーガロイヤルホテル ベラコスタ	新入会員紹介(中川 城本 三林の3氏) 卓話「薬物依存症からの回復」 講師 一般社団法人神戸ダルクヴィレッジ代表 梅田靖規氏	広報誌 44号発行
10	8,9		クラブ旅行	「金沢の秋を訪ねて」星野リゾート界加賀一泊 (10名参加)	10/19～10/21 第14回地区大会(於JRH ホテルクレメント高松)(4名参加)
	12	木	リーガロイヤルホテル ベラコスタ	AM実行委員会の結成 澤井ADによる概要説明	エリアミーティング第1回実行委員会
11	9	木	リーガロイヤルホテル ベラコスタ	イベント、エリアミーティングの準備	エリアミーティングにつきホテル側と打ち合わせ
12	14	木	忘年会(於花外楼)	チャリティイベントの準備 チラシの作成・発送	12/1 奉仕委員会 福祉施設「かざぐるま」訪問 (11名参加) エリアミーティング第2回実行委員会

2018

1	11	木	リーガロイヤルホテル ベラコスタ	チャリティイベントの準備 ゾンタを学ぼう「アメリカアハートの業績と生涯」	エリアミーティング第3回実行委員会
2	8	木	リーガロイヤルホテル ベラコスタ	イベント役割分担の確認、イベント申し込み 状況・入金状況、配席・くじ引きについて討議 横浜国際大会プレデンシャルデスク割り当て 指名委員選出:辻、西村、中塚の3会員	2/25(日)チャリティイベント vol.23「ときめ きハーモニー」於リーガロイヤルホテル大阪 「桂の間」(101名参加) 広報誌 45号発行 エリアミーティング第4回実行委員会
3	8	土	リーガロイヤルホテル ベラコスタ	チャリティイベントの収支報告、反省など 次期役員候補者発表 国際ゾンタ会計について	3/8 ゾンタローズデー エリアミーティング第5回実行委員会
4	12	木	リーガロイヤルホテル ベラコスタ	エリアミーティング準備 申し込み状況・入金状況・役割確認	エリアミーティング第6回実行委員会
5	10	木	リーガロイヤルホテル ベラコスタ	エリアミーティングリハーサル、会場下見・プロ グラム表紙検討、料理の決定、プログラムの 校正、会場設営の打ち合わせ、講演者との最終 打ち合わせ、配布物の準備など	エリアミーティング第7回実行委員会、試食会 5/26(土)前夜祭(ベラコスタ)(40名参加) 5/27(日)エリアミーティング(於リーガロイヤ ルホテル大阪「山楽の間」)(170名参加)

なぜ第二外国語が必要なのか？

坂本 千代



私の勤務している大学の学生たちは、最初の1年間、外国語を2つ履修しなければなりません。今年入学した学生になぜ第二外国語履修が必要なのかということ、私が現在研究しているスタール夫人を引き合いに出して以下のように説明しました。

皆さんは高校卒業までに6年あるいはそれ以上英語を学んだ人が大多数ですが、本学に入学したら英語はもちろん、そのほかに「未修外国語」を最低1年学ばなくてはなりません。ドイツ語やフランス語やロシア語や中国語の知識がなくても、日本で生きていくのに全く不都合はありませんし、英語ができれば外国とかかわりのある仕事もたいい大丈夫なのに、なぜそれが必修科目なのでしょう？第二外国語の知識は、あればもちろんいいけれどなくても全然困らない「ぜいたく品」のようなもので、本学で修業するからにはそのような「ぜいたく品」も身につけるべきだからでしょうか？そうかもしれませんね。でも、外国語というのは人生をより豊かに楽しくしてくれる知識だと私は思います。

「新しい言語を学ぶことはもうひとつの人生を生きるようなものだ」と言った人がいます。未知の外国語を学ぶときには、だれでもまず生まれたての赤ん坊のように一歩ずつ基礎的なことから覚えこんでいかななくてはなりません。ただ、小さな子どもと違って、私たちは大人の頭脳を駆使してより効率的にその言語を学ぶことができます。大人はまた、新しい言語を自分の既に知っている言語と比べたり置き換えたりして、その面白さや深さや複雑さを味わうことができます。別の人は「言語は世界を見るための窓」と言い表しました。窓が多ければ多いほど世界の多様な側面を見ることができるからでしょう。日本語と（大多数の皆さんの場合は）英語のほかにもうひとつ言語の窓を足して、三次元で世界を把握したり自分を表現できるようになるといいですね。

最後に蛇足ですが、18世紀末から19世紀初めにかけて活躍した文学者のスタール夫人の『ドイツ論』（1810年刊）に次のような文章があります。

「思想に立ち向かうにはドイツ語を、人と力を競うにはフランス語を使わなければならない。ドイツ語の力を借りて深く掘り下げ、フランス語を話して目的に到達しなければならない。ドイツ語は自然描写にフランス語は社会描写に使うべきである。ゲーテは『ヴィルヘルム・マイスター』の中であるドイツ人の女性に、恋人がフランス語で手紙をくれたので、彼が彼女から離れたがっていることに気づいたと言わせている。事実フランス語には、言外の言葉や、あることを言わないための言葉、約束することなく期待させたり、拘束することさえないのに約束するためなどの多くの言い回しがある。ドイツ語にはそんな柔軟性がない。そしてそのままでのよいのだ。」（スタール夫人『ドイツ論1』梶谷温子ほか訳、第1部第12章）

パリ生まれでパリ育ち（ただし両親はスイス人、夫はスウェーデン人）のスタール夫人はフランス革命時代をたくましく生き抜き、ナポレオンに嫌われて亡命を余儀なくされながらも、近代ヨーロッパで国際的に活動した最初の女性作家です。彼女がもしロシア語や中国語に堪能だったなら、それらについて何と言っただろうと興味をそそられます。



スタール夫人

編集後記

今年前半はチャリティイベントとエリアミーティングの準備が大変でした。6月末から7月初めの横浜でのゾンタ世界大会参加についての記事は、来年3月発行の広報紙に掲載予定です。猛暑の中で編集作業をしましたが、この広報紙が発行される頃には涼しくなっていることを切に願います。

坂本 千代